

## 記 事

### 例会記録

日本医史学会・日本歯科医史学会・日本薬史学会・  
日本獣医史学会・日本看護歴史学会 12月合同例会  
平成21年12月12日(土)  
順天堂大学医学部9号館2階8番教室

1. 葛原勾当日記に記載された疾患について  
新藤恵久
2. 戦前の日本赤十字社看護人の救護活動  
山崎裕二
3. 日本のワクチン受容史  
——ジェンナー博物館にて予防接種法を考える  
渡部幹夫

4. 薬とは何か 遠藤次郎
5. 日本在来馬と西洋馬  
——日欧獣医学交流史と関連して——  
小佐々学

日本医史学会 1月例会 平成22年1月23日(土)  
順天堂大学医学部10号館2階カンファレンスルーム

1. 日本における金瘡治療の展開  
～白朝散を中心に～ 森田まゆ
2. 『資料集 日本の精神障害者(戦前篇)』編集に  
むけて 岡田靖雄

### 例会抄録

## 戦前の日本赤十字社看護人の救護活動

山崎 裕二

### はじめに(問題意識)

近年、女性社会である看護職への男性参加が進み、看護師や保健師の男女協働が始まっている。しかし、歴史的にみれば、第二次世界大戦以前(以下、戦前と略称)において、軍隊や日本赤十字社(以下、日赤と略称)、精神病院、ハンセン病療養所などに男性看護人が存在し、看護婦と協働していた。その中には看護婦と同様に近代的な看護の知識・技術の教育を受けた男性看護人も存在した。これら男性看護人の歴史はいまだ十分に明らかにされていない。以下、日赤看護人についてその救護活動を中心に報告する。

### 1. 養成

軍隊における傷病兵救護を目的とする日赤の看護婦は1890年に、看護人は1896年に養成が開始された。入学資格年齢は、看護婦が16歳以上30歳未満、看護人が20歳以上40歳未満であった。修業年限は、看護婦が3年、看護人は10ヶ月(前期5ヶ月は学科、後期5ヶ月は実務練習)であり、養成場所は、両者ともに日赤本社病院および支部病院であったが、看護人の後期は最寄りの陸軍衛戍病院であった。学科目は、解剖及生理・看護法・治療介輔・手術介輔・繃帯法・救急処置・患者運搬法・衛生法大意で看護婦と看護人で大差なかった。養成数は、1890～1922年において看護婦

表1 災害救護に派遣された看護人数と救護員全体に占める割合

年	1908	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
全体数	244	296	774	591	649	665	934	1378	1052	2069	1396	1612	1831	1795	1888
看護人数	20	21	68	70	123	75	134	95	82	143	114	156	138	62	16
割合(%)	8.2	7.1	8.9	11.8	19.0	11.3	14.3	6.9	7.8	6.9	8.2	9.7	7.5	3.5	0.8

(『日本赤十字社史統稿・下巻』および『日本赤十字』掲載記事により作成)

6,740名, 看護人1,553名であり, 1923~1945年において看護婦18,652名, 看護人8名であった. 看護人は看護卒や兵役の経験者であったため短期養成であった.

## 2. 戦時救護

日清戦争, 義和団事変, 日露戦争の救護において日赤看護婦の戦地派遣は陸軍から許可されなかった. 将兵との風紀問題, 敵国での「凌辱と危険」, 「体格柔弱」などが危惧されたからである. よって戦地救護は看護人救護班だけで行われた. 看護人は医員の診療介助や患者看護のほか, 人手不足により調剤業務や食事運搬などの広範な業務にも従事した. 赤痢, 腸チフスなどの感染症患者の看護を通して自ら感染し命を落とす看護人も多かった. 日清・日露戦争を通して看護人の死亡率が救護員のなかで一番高かった. 看護人の最後の戦地派遣となったシベリア出兵時の救護では, 先遣隊として派遣され, 病院開設作業後, 海軍からチェコ軍患者を引き継いだ. その後, 救護活動が軌道に乗って増派されてきた看護婦救護班と協働し, 病院列車での患者搬送などにも従事した. 1920年代以降は, 陸軍の看護婦戦地派遣反対論が消滅したことや看護婦の方が志願者を多く確保できたことなどの理由から看護人養成と準備は行われなくなった. 1939年の戦時救護規則改正で看護人救護班の準備数は0となり, 十五年戦争や太平洋戦争の戦時救護に看護人は派遣されなかった.

## 3. 平時救護(災害救護)

日赤は1911年, 災害救護規則を制定し「天災事変其ノ他公衆ノ災害」への救護活動をそれまで以上に積極的に展開した. 天災救護よりも式典・

集会などの傷病者救護への救護班派遣が多く, その派遣回数は1908年~1922年の合計が3,882回であった. 看護人の派遣数は1910年代を通して増加し, 救護員全体に占める割合も7~19%で推移しており, 看護婦とともに災害救護活動の中心を担ったことがわかる(表1). また, 中国辛亥革命時の漢口事変救護(1911年)では看護人救護班が派遣され, 清掃・わら布団製作などを含む救護所開設作業から開始し, 現地住民の患者に家族看護ではない専門看護人の存在を理解してもらったり, 婦人への看護に抵抗感を示されたりといった経験をしている.

## 4. 考察

明治・大正期の日赤の救護活動において, 看護人は戦時・平時ともに活躍する機会が多かった. それは看護人の男性としてのジェンダー・セクシュアリティ特性(腕力や体力の強さ, 男性兵士との関係性など)を理由にしたものであった. その中で特に, 1910年代において日赤看護人が多様な災害救護活動に従事し, 看護婦と協力して被災傷病者の救護にあたったことは, 日本近代看護史のなかで忘れてはならない貴重な遺産であろう. また, その史実は, 現代における看護師の男女協働について考えるための手がかりを私たちに示しているともいえよう.

## 【文献】

拙稿「近代看護史のなかの男性看護者(1)~(7)」, 『日本赤十字武蔵野(女子)短期大学紀要』第8号~第13号, 1995年~2000年

(平成21年12月例会)